

第3代
県令

吉田清英展

埼玉の人物

埼玉県立文書館×埼玉県立歴史と民俗の博物館

吉田清英肖像（埼玉県立文書館館蔵）

平成 29 年

4/25(火)

→ 7/23(日)

開館時間 9:00～16:30（7/1～は9:00～17:00）
休館日 月曜日（7/17（祝）は開館）
臨時休館日（6/12（月）～19（月））

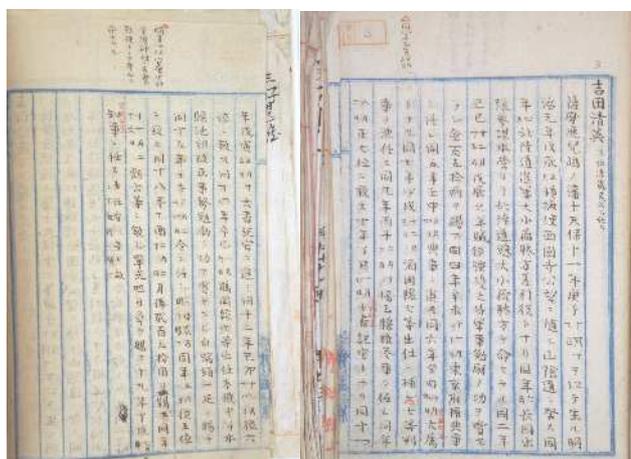
薩摩国（現鹿児島県）生まれの吉田清英（1840～1918）は、薩摩藩士として戊辰戦争に参加し、明治維新後に官僚となりました。明治9年（1876）には埼玉県に赴任し、同15年に第3代県令となり、同19年には制度改正で初代知事となりました。

在任中には、鉄道開業・新道建設といった社会資本整備や地場産業の振興を進め、災害やコレラへの対策にも取り組み、秩父事件にも対応しました。引退後には本庄町（現本庄市）に移住し、養蚕、製糸といったシルク産業の発展に尽くしました。

本展では、こうした吉田の事績と同時代の埼玉県の様子を紹介します。

プロローグ 吉田県令の履歴書

みなさんは吉田清英のことを知っていますか？ 今から約130年前、明治10年代から20年代はじめてかけて、埼玉県の長官（県令・知事）を務めた人物です。はじめに埼玉県行政文書に残る肖像写真と履歴書で吉田を紹介します。



吉田清英の履歴書（明907-3）



吉田清英の肖像（A16989）

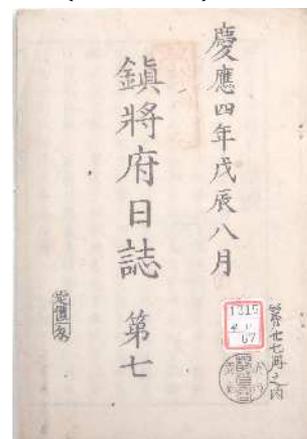
生い立ちから県令就任まで 薩摩生まれ、新政府に出仕

慶應4年（1868）1月、薩摩藩士だった吉田清英は、旧幕府軍と新政府軍が政権を争った戊辰戦争に従軍します。新政府軍の山陰道鎮撫総督西園寺公望に随い、幕府が支配していた生野银山（現兵庫県）を接收、続いて北陸道に進み、4月には大小荷駄方差引役に、6月には越後長岡藩と戦った北越戦争で、北陸道総大小荷駄方に任命されました。

大荷駄は兵器弾薬、小荷駄は食糧・医薬品のことであり、吉田は新政府軍の北陸方面での物資輸送の責任者を務めていたのです。

戊辰戦争後、いったん郷里の鹿児島へ帰った吉田は薩摩藩の改革に従事したといえます。明治4年（1871）11月、新政府の官僚となり、東京府庁の権典事に任命されます。当初は六二と名乗り、営繕掛として東京近郊の測量などに従事していたようです。次いで税関係の部署である正租掛の担当になっています。

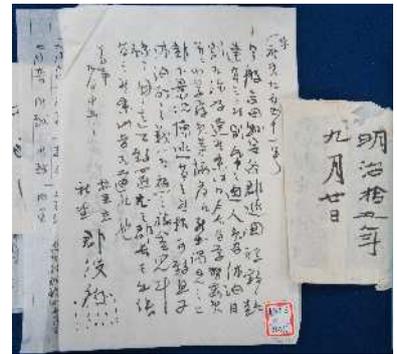
明治7年12月、吉田は酒田県（現在の山形県の一部）七等出仕となります。これは同じ薩摩出身の官僚三島通庸が東北地方経営のため、酒田県令に任命された日と同日のことでした。



北越戦争を記録した
「鎮将府日誌 第七」
（平川家 67）

明治9年(1876)6月、吉田は鶴岡県(酒田県から改称)から転じ、埼玉県権参事となりました。8月には熊谷県が廃止され、旧武蔵国西部が埼玉県に統合、県土が確定する頃のことです。

吉田は第2代県令白根多助を補佐し、政府が県に課した地租改正、徴兵制、学制といった諸改革、また一定の地方自治や殖産興業が進められた時期の県政を担いました。



県令の各郡巡回への対応記録

(西川家 942)

吉田県政の時代 様々な課題との格闘

明治15年(1882)3月、第2代県令白根多助の死去により、吉田は第3代県令となります。

吉田が県令・知事に在任していた明治15年から22年という時期は、新政府が近代国家への助走とした段階から、内閣、法制度、大日本帝国憲法、帝国議会など国のかたちが固まってくる段階への移行の時期でした。また地方では市制・町村制が導入され、一定の自治が行われるようになりました。

産業の振興

明治はじめには「富国強兵」の実現のため、国をあげて「殖産興業」が目指されました。当初は、富岡製糸場のように国営工場による新産業の振興が図られましたが、国の財政難などの理由により、吉田県政の頃には、民間資本の育成に方針が転換されていました。

埼玉県も、すぐれた農産物を展示・表彰する共進会の開催や、品質向上のための組合の結成などを通して、当時の重要輸出産業だった蚕糸業や茶業の振興に取り組みました。

日本鉄道会社線の開業と新道の開さく

新政府は明治5年(1872)10月に開業した新橋・横浜間の路線を手始めに鉄道整備を進めましたが、財政難により、私設鉄道を認めることになりました。明治14年、華族(旧公家)や旧大名(旧名家)等が設立した日本鉄道会社は、東京・高崎間、東京・青森間の路線を計画しました。埼玉県は測量や用地取得に協力し、同時に県内有力者に対して会社への出資を勧めました。

明治16年10月には熊谷まで、翌年には前橋までが開業し、養蚕地帯と貿易港である横浜が鉄道で結ばれました。明治16年の日本鉄道会社線第一区線(現在のJR高崎線)の開業は、埼玉県の交通を大きく変化させました。それまで中山道のような主要な道路の改修のみが県の補助の対象でしたが、鉄道の開通により、停車場を起点とする新道の整備が脚光を浴びるようになり、補助金の交付も行われるようになりました。

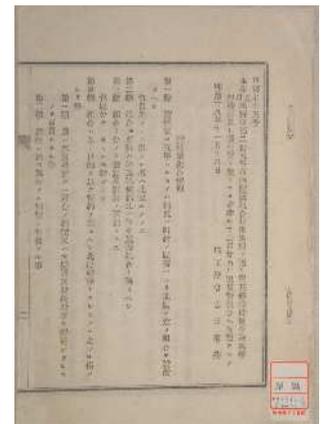
コレラ対策

コレラ菌に汚染された水や食物により感染する伝染病のコレラは、死亡率の高い恐ろしい病気でした。

江戸時代からたびたび流行し、明治10年(1877)、12年、19年、28年にも全国的な流行がありました。このコレラへの対策も、県の重要な課題でした。

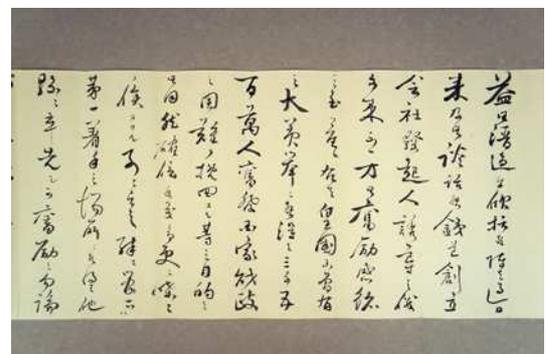
秩父事件

明治17年(1884)10月31日、秩父事件が発生します。政府の緊縮財政による経済不況のなか、繭価格



蚕糸業組合の規則

(岸田氏収集 7204)



日本鉄道会社の発起人勧誘についての書状

(鈴木(庸)家 7176)

の暴落のため多額の負債を抱えた秩父郡の養蚕農家が、自由民権運動の思潮を背景に負債の減免などを求めて蜂起した事件です。

困民党と呼ばれた8,000人ともいわれる農民たちは、秩父大宮郷（現秩父市）の秩父郡役所を占拠しました。吉田は県令として、国の対応を求め、事件に対処、前年に開業した日本鉄道会社線によって東京から送られた警察、陸軍によって困民党は鎮圧されました。

県庁移転をめぐる

県庁をどこに置くか、この問題は埼玉県成立以来たびたび議論されてきました。

明治4年（1871）埼玉県成立のとき、県庁は岩槻の予定でしたが、実際は浦和に置かれました。明治9年に旧入間県が埼玉県に統合された際には、県北の有力者が県庁を熊谷に移転するよう請願しています。

明治20年、吉田は県庁の熊谷移転を山県有朋内務大臣に上申しました。これに対して県会議長の加藤政之助を中心に反対運動が起こり、現状維持と決定されました。

シルク産業への貢献 本庄での余生

明治22年（1889）県知事を退いた吉田は、本庄町（現本庄市）に移住します。本庄町では赤城山を臨む景勝地に居を構え、蚕糸業の発展に尽力しました。明治24年には日本蚕種貯蔵株式会社を設立、自宅敷地内に新式の貯蔵庫を建設しました。

本庄町で晩年を過ごした吉田は、大正7年（1918）東京市麹町区（現東京都千代田区）にあった長男の邸宅で生涯を終えました。県内に残るゆかりの石碑や記念樹は、吉田の事績を今に伝えています。



室蔵貯種蚕

日本蚕種貯蔵株式会社貯蔵庫
（『目でみる埼玉百年』より）



清英夫妻と二男英助夫妻（個人蔵）



本庄西中の吉田が寄贈した月桂樹（当館撮影）



青山霊園の吉田家墓所（当館撮影）

「埼玉の人物 第3代県令 吉田清英」解説リーフレット
平成29年4月25日 編集・発行 埼玉県立文書館